

〒467-8501 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1番地 Tel 052-872-3452 Fax 052-872-3536
 Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

■ シンポジウム「山村の開発・環境と地域文化」報告

(主催: 人間文化研究所、名古屋市立大学特別研究奨励費・人間文化研究所共同研究プロジェクト)

「東海地方における漁村・山村の歴史と文化—開発・環境・生活文化」研究会

名古屋市立大学人間文化研究所主催の公開シンポジウム「山村の開発・環境と地域文化」が、2007年3月16日(金)、人文社会学部棟201教室にて開催された。このテーマは都市に暮らす現代人にも関心のあるものだったようで、会場には一般の参加者も多数が集まり、にぎやかなシンポジウムとなった。

山村や漁村の開発と環境の問題について、歴史学の立場からも何か発言すべきだし、是非何か発信したい。そう考えて立ち上げた共同研究プロジェクトであったが、その成果——といっても中間報告であるが——をこのような形で公表することができ、意味ある催しになったと考えている。

最初の報告は白水智氏(中央学院大学法学部助教授)の「山村の生活文化と現代」である。白水氏は、『知られざる日本——山村の語る歴史世界』(NHKブックス、2005年)で知られる気鋭の研究者で、山村や漁村の歴史研究の専門家である。日本史学の分野では、長く農村中心史観、稲作中心史観が学界の主流を占め、世の中の実態とはかけ離れた歴史認識が形作られてきた。そうした動向を正面から批判し、商人、職人など非農業民の活動の重要性を解明し、また山村、海村のいきいきとした姿の解明に取り組ん

だのが故網野善彦氏であった。白水氏は、網野氏の教えを受けた研究者で、網野氏の残した成果をさらに発展させようと精力的な調



査、研究に取り組んでいる。今回の報告では、山村の生活文化とその歴史の変遷を解明していくことの意義と視点が述べられた。白水氏は、決して閉ざされた世界ではなかった山村の姿を写真や地図を用いながら紹介し、山村の生活文化体系をわかりやすく述べていった。そして「環境無視史観」を脱却して、人のみえる歴史研究を進めなくてはならないと論じて報告を終えた。

報告2は脊古真哉(名古屋市立大学非常勤講師)の「白山をめぐる地域の宗教文化とその変貌」である。山岳信仰や浄土真宗史の研究で知られる脊古氏は、最初に白山に対する信仰といわゆる三馬場の成立について、その概略を解説した。そして、白山をめぐる地域にしたいに浄土真宗の信仰が浸透していき、それが山の民たちの信仰の中核になっていったことについて実証的に論じていった。山の民、川の民と初期真宗との密接な関連については、すでに故井上鋭男氏によるすぐれた研究があるが、脊古氏はその成果を継承、発展させ、精力的な実地調査の成果を組み込んで、その具体的な姿と特色を解き明かしていった。

報告3は吉田一彦(名古屋市立大学人間文化研究科教授)「ダムの開発と文化財——本年度の調査から——」で

ある。山村の開発や環境の問題は、今日、具体的にはダム建設の問題として現れる場合が少なくない。この報告では、徳山ダムの旧徳山村、九頭竜ダムの旧和泉村、御母衣ダムの旧荘川村をフィールドとし、ダムの建設と文化財の問題について考えた。ダム建設が行なわれる場合、文化財の調査はかなり徹底的に行なわれ、考古学の発掘調査や民俗調査も実施される。しかしながら、村の道場の調査は必ずしも十分に行なわれておらず、その文化財の行方についても把握されていない場合がある。この報告では、共同研究チームの調査によって明らかになった浄土真宗の道場の文化財の行方について述べた。

三つの報告とも写真が豊富に用いられ、会場のスクリーンには、現在の山村の姿や開発の様子、また調査で明らかになった方便法身尊像とその裏書などの道場の文化財が大きく映し出された。

報告の終了後、村井忠政人間文化研究所所長を総司

会として、二人のコメントからコメントと、総合討論が行なわれた。まず林淳氏(愛



知学院大学文学部教授)から、各報告者に対して質問がなされ、それに対する応答がなされた。次いで福井重治氏(岐阜県立高山工業高校教諭)から、プリントを使った説明がなされ、報告を補う形のコメントが述べられた。その後の総合討論では、フロアからも熱心な質問や意見表明が飛び出し、活気に満ちた議論がなされた。午後1時30分に開始されたシンポジウムは午後6時に終了した。

(人間文化研究科教授 吉田一彦)

■ 「特別支援教育」に関する支援プログラム開発研究会による、公開研修会・講演会報告

障害をもつ子どものための教育法制度が、現在、大きく変わろうとしている。従来の学校教育法制度においては、障害をもつ子どものための教育は「特殊教育」と呼ばれ、盲・聾・養護の各学校と、普通学校に設置される特殊学級において実施されてきた。しかし近年、LD(学習障害)、ADHD(注意欠陥・多動性障害)、高機能自閉症など、従来の特殊教育では対象とされてこなかった軽度発達障害の子どもが増え、あるいは顕在化してきたことによって、そうした特別なニーズに応える教育が学校現場で求められるようになってきている。文部科学省では2001年から「特別支援教育」という呼称を用いて多様な障害や特別なニーズに応える教育制度のあり方を模索し、学校教育法施行規則の一部改正などによって対応を弾力化してきたところであるが、ついに、この2007年4月から学校教育法等の一部改正が施行され、従来の「特殊教育」は「特別支援教育」へと全面的に制度変更されることとなった。これにより、障害をもつ子どものための教育は、「特別支援学校」(従来の盲・聾・養護学校)と普通学校における「特別支援学級」および通級による指導へと再編成されることとなり、各自治体ではそれぞれに特別支援教育体制を構築する必要に迫られている。

こうした転換期において名古屋市大としてどのような地域貢献ができるのかを研究するため、医・看護・人間文化研究科横断による「特別支援教育」に関する支援プログラム開発研究会」がたちあがり、2006年度名古屋市大特別研究奨励費

に採択された。本研究会では、先進的自治体事例や医学・臨床心理学等の知見に学びつつ、とくに名古屋市の関係者との連携方策について研究してきたが、1月と2月に人間文化研究所の後援を受けて2つの公開研究会を開催したので、その概要を以下に報告する。



まず、研究会を重ねる中で心理アセスメントの基本的理解について現場職員のニーズが非常に高いことを知り、名古屋市教育センターとのジョイ

ント企画として、2007年1月13日(土)13:30~16:30、人社棟201教室にて、本研究会メンバーである看護学研究科小笠原昭彦教授を講師として「心理アセスメントの最前線：WISC-IIIによるアセスメントと指導の基本」を開催した(主催：名古屋市立大学「特別支援教育」支援プログラム開発研究会、後援：人間文化研究所)。教育センターから学校教員の方々へ告知されたこともあり、当日は100人近くの参加者があり、そのほとんどが学校教員や福祉系の職種の方と見受けられた。

講演では心理アセスメントの目的や歴史について触れた後、現在現場で広く用いられている心理アセスメントであるWISC-III(Wechsler Intelligence Scale for Children)の概要

とその教育指導への活用方法などについて説明された。WISC-Ⅲでは、全検査知能指数(全般的な知能水準)だけでなく、言語性知能指数と動作性知能指数、さらに「言語理解」「知覚統合」「注意記憶」「処理速度」の4つの群指数も測定される。これによりその子どもの苦手な能力と、得意な能力が明らかとなるが、小笠原教授は子どもの苦手な能力を鍛える「短所改善型指導」ではなく、得意な能力を活用して新しい知識・技能を獲得させる「長所活用型指導」が有効であると話された。また現在指導に関わっている子どもの事例も紹介され、質疑応答の時間には WISC-Ⅲ実施についての具体的な質問がいくつか出されて、密度の濃い研究会となった。

続いて2月17日(土)13:30~16:30、人社棟201教室にて、講演会「どうなる、どうする、特別支援教育」を開催した(主催:名古屋



立大学「特別支援教育」支援プログラム開発研究会、共催:東海地方 K-ABC 研究会、後援:人間文化研究所)。まず、奈良教育大学助教授の越野和之先生に「どうなる、どうする、特別支援教育—特別支援教育研究の視点から」と題して講演いただいた。越野先生はパワーポイント資料を用いながら、特別支援教育制度に関わってどのような法律改正がなされるのかについて詳細に紹介した後、学校現場では年間指導時間の制約や教員配置が少ないなど問題が小さくないことを指摘した上で、学校教育現場の指導において留意すべき点についていくつか課題を挙げられた。



次に、愛知県立千種聾学校の竹沢清先生に「特別支援教育で現場はどう変わるか?—特別支援

教育と障害児学級・普通学級の取り組みに関わって」と題して講演いただいた。竹沢先生は障害をもつ子どもの教育に携わってきた長年の経験から、障害をもつ子どもへの指導のあり方についていくつかの事例を紹介された。時折ダイナミックな振り手振りを加えるなどの独特の語り口が、聴衆の心をつかんだ講演であった。

お二人の講演はそれぞれアプローチが異なっていたものの、子どもを「困った子」とか「異なるニーズをもった特殊な子」と見るのではなく、「困っている子」であり「他の子どもと同じニーズをもつが、それを満たす上で特別な困難をもつ子」と見るべきであるとした点は同じであった。また担任任せではなく、担任の試行錯誤を許容するような、教員集団による全校支援体制づくりが重要であるとの指摘も共通していた。

講演の後、研究会メンバーの人間文化研究科滝村雅人教授によりコメ



ントが加えられ、特別支援教育制度は子どもの思いが不在の政策主導的な印象があると指摘した後、名市大として各学校・教師の試行錯誤を助けるような支援が重要であり、そのための条件整備を学内で進めることの必要性が述べられた。その後のフロアとの質疑応答においても、現場の教職員の方々からいくつかの具体的な質問が出され、法制度のスタートに当たって様々な課題が存在するのを感じさせられた。

最後に、この1年間の活動を通じて、現場の教職員や関係機関と連携したプログラム開発のためには、限られた教員による閉ざされた研究会の形ではなく、大学の地域貢献システムの大きな枠組みの中に位置付きながら戦略的に動いていく必要があることを痛感したことを、付記しておく。

(人間文化研究科准教授 成玖美)

■ 『人間文化研究所年報』第2号、もうすぐ発行です!

お待たせしております。『人間文化研究所年報』第2号は、もうすぐ完成します。本号の特集は「トランスナショナリズム」で、第1部「越境の文学」、第2部「外国人住民との共生」の構成となっています。研究所発足以来、共同研究プロジェクトとして取り組まれてきた「越境する文学の総合的研究」の成果や、この2年間の研究所活動の主たるテーマであった「多文化共生」に関わる研究成果などが掲載されています。創刊号に続き、第2号も充実の内容となりましたので、ぜひご期待下さい。



リレーエッセイ 人間・地域・共生

第8回「退官記念論文集の刊行にあたって」 村井 忠政(人間文化研究科教授)

本年3月をもって本学を退官すると同時に、人間文化研究所長を退任することになった。私の退職に合わせて、これまで大学院で一緒に研究してきた同僚や院生たち(全員で16名になるが、これには他大学の教員・院生も含まれる)が、退官記念論文集(村井忠政編著『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生—グローバル化時代の日系人—』明石書店、2007年3月)の出版を企画してくれ、このたびなんとか刊行にこぎつけることができた。

本書はたんなる論文集ではない。数年に及ぶ大学院ゼミ(課題研究「多文化共生に関する研究」)での若手研究者たち相互の報告や討論の積み重ねの中でまとまった共同研究の成果である。原稿執筆段階に入ってから、毎週月曜日の夕方6時から9時までの3時間、相互に原稿を読み合い、厳しい指摘や批判を受けることで原稿を何度も書き直し、補筆修正を加え、時間をかけて編集作業を進めてきた。

本書は二部構成になっている。第一部「トランスナショナル・アイデンティティ」では主として北米の日系人が取り上げられているが、これらの論稿を貫いている主題は、戦前戦後の北米におけるアジア系移民に対する人種的偏見や差別が日系人のアイデンティティにどのような影響をおよぼしたかというものである。第二部「多文化共生」で取り上げられている南米日系人の場合、その移住先は第一部とはまさに反対のベクトルとなっており、北米の異文化社会ではなく、父祖の故国日本である。「還流型移民」(return migrants)と呼ばれるかれら日系人を待ち受けていたのは、エスニシティを同じくする父祖の郷里(ethnic homeland)が、かれらを同胞として受け入れてはくれず、いわゆる3Kと呼ばれる単純労働に従事する外国人労働者として差別や偏見の対象になるという皮肉な現実であった。

本書はいまだ試行的な段階にとどまってはいるものの、トランスナショナルな視点から日系人の移住現象を捉えようとする試みである。従来の日系人研究のパラダイムが、日系人のホスト社会への同化ないし統合を前提とするものであったが、それに加えてトランスナショナルな移住に焦点を当てることで、日系人研究に新しい視点を導入しようとするものである。本書がわが国における移民・外国人研究に一石を投じるものとなることを願っている。(写真:2007年2月5日、マンデーサロンの村井所長)



編集後記 この2年間、所員として、主に研究情報の収集・掲示とマンデーサロンの開催を担当しました。研究所という制度と場所ができたことによって、数多くのシンポジウムや講演会が目に見える形で日常的に開催されるようになりました。研究所の基盤作りに多少なりとも貢献できていれぱうれしく思います。至らぬ点が多々ありましたが、村井所長、成先生、ご協力くださいました先生方、事務職員のみなさま、ありがとうございました。(山本明代)

ニュースレターと研究所年報の編集、およびホームページ更新を主に担当してきました。洒落た編集ソフトを使いこなせないため、このニュースレターはデザインから原稿編集まで、自分のパソコンのWordソフトでつくってきました。年報のほうは業者に入ってもらいましたので、通常の「大学紀要」とは異なり紙面デザインに多少凝ることができ、先生方からご好評を得られたことが嬉しかったものです。ホームページの方は、ズボラな性分ゆえに更新が遅れがちで、ご迷惑をおかけしました。何も無いところから始めたこの2年間で、それなりの成果物をつくることができたとは思いますが、より広く情報や成果を発信するシステム作りまでは力が及びませんでした。次期研究所スタッフに多くの課題を残すことになりましたが、新しい視点から、研究所の発展を目指していただきたいと思います。皆様、この2年間、ありがとうございました。(成玖美)